

星の輝き

おののっきー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

星輝子が好きで書きました。このツイートを元にして書いています。<https://twitter.com/ppp40/ppp40/status/1080865740469678080?s=09>

先の展開が全く決まっておらず勢いだけで書いていますので更新は不定期で時間が空くと思います。ネタがあつたらいつてくださるとありがたいです。

(なお作者の目線は主人公ではなくプロデューサーのような父親のよ
うなポジションです)

目次

プロローグ	1
俺とキノコ	4
俺とメタル	8
俺と苛めっ子	14

プロローグ

「またあの子一人ぼっちよ。」

「駄目よ。あんな変な子に関わったらこっちも変な目で見られるわよ。校倉あぜくらさんもあの子のことが気に入らないみたいだし。あたし見たもん、校倉さんがあの子の机になんかしてるの。」

「やだねー、関わらないようにしよー。」

……そういうことを笑いながら話すお前らもどうかと思うがな。

俺の名前は月宮佑つきみやゆう。都内の高校に通っている。……が、このクラスには少々問題が起きています。

そう、イジメだ。

対象となっているのは今年福島から東京に越してきた、星輝子という子だった。

イジメというのは大体喋るのが下手、地味な子、趣味が変わった子というのが多いと思うが、残念なことに彼女には全てが当てはまっていた。彼女がクラスでの自己紹介を行ったときのセリフが、

『え、えっと……星輝子、です。趣味は、キノコの、栽培、です。えっと……ヨロシクオネガイシマス。』

もごもごととして聞き取りにくいしゃべり方、キノコの栽培というマニアックな趣味、暗くて誰とも話さない、イジメられる要素の役満だな。

まだ4月だが、当然のようにイジメは起きた。主犯は校倉要あぜくらかなめという少女らしい。家が金持ちであり、親がこの学校の実質的な実権を持っているらしい。

俺が知っているだけでもノートに落書きをしたり、靴を隠されたりしているようだった。昼飯も今では屋上で食べていた。

(部活行……)

放課後ということもあり、廊下にまばらになった生徒を抜けて体育館に向かう。件の星は早々に教室を出たよう席にはいなかった。

「そういえば今日は部活ないんだった……。」

体育館に向かったのはいいが、着いたら一面バスケット部が使っており、自分が所属するバレエ部の部員は誰一人いなかった。

「まあいいや。帰って漫画でも読も……。」

少し遅くなったが、自転車に乗って帰る。本当だったら原付に乗りたいが、年齢がな……。その時、自分の前に誰かが自転車で走っていることに気づいた。

(誰だ……?)

よく見てみると、特徴的な長い灰色の髪をなびかせた星の姿だった。

「♪」

(鼻歌?鼻歌とか歌うんだな……)

星は俺に気付いている様子はなく、明るい声音で鼻歌を歌っていた。

(……意外と可愛い声してるな……てかこの歌……)

「くくれないくにそまつたくこくのおくれくをく……」

(紅かよ!!)

ジャリッ

「ヒッ!」

(!気付かれた!?)

星が勢いよくこちらへ振り替える。

(いや別に気付かれたからってなんかある訳じゃないけど、声可愛かったか思ってたのが恥ずかしいわけじゃないけど!?)

誰に言い訳するわけでもなく慌てていた俺だったが、こちらを振り返った星と目が合う。

「え……あ……」

「え」

「うああ……ひゃあー……!!!」

え、なに、今の。

え?今のが星?いつも下向いてばかりであんなにはつきりと顔

見たことなかったけど、あんなに可愛いのか？嘘だろ？鼻歌聞かれたの
恥ずかしくて、顔赤らめてたの、可愛すぎないか？てか声、あんなに
可愛かったのか？歌もうまいし……自己紹介のときと全然違うじや
ん！あれ本当にあの星なのか!?

「何だ、あいつ……」

俺がフリーズしている間に星は凄い勢いで帰ってしまった。だが、
星がさっきまでいた場所に、星のものであろうハンカチが落ちてい
た。

反射的にそれを拾い上げると、ハンカチ全体が種類が分からないキ
ノコで埋め尽くされていた。

「何だあいつ!？」

これは俺が、ボツチでキノコな星輝子に、一目惚れをした物語だ。

俺とキノコ

「はああああ……………」

次の日の教室、昨日からため息が増えた気がする。

あの後、数分ほどの思考停止から帰ってきて、星のハンカチを拾った。拾ったはいいが、どうすればいいか分からなかった。

いや、星に返せばいいのは分かってるんだが、え、あの星にまた会うの？

…………とりあえず家で洗濯、乾燥し、今はたたんで包装に詰めて鞆の中に入っている。

「おいおいどうしたんだよ月宮。ため息ついてると幸せが逃げるって知らねえのか？」

「友田…………お前には関係ねえよ。」

今話しかけてきたやつは友田祐弥。俺と同じ部活で、セッターをやっている。中学からの友達で、「俺とお前どっちもゆうだから俺たちユーユーコンビだな！」って言ったのはいい思い出。クラスのやつらからはよくユーユー言われてたな。

「いや、机に頭こすりつけてため息とか、悩んでまーす、相談してくださいーいって言ってるようなもんだぞ。」

「うるせえ……………」

まあ悩んではいるのだが…………正直渡しづらい。だって今まで話しかけたこともない女子に話しかけるとかハードル高すぎるだろ!!

「はあ……………」

「これは重症だな。好きな人でも出来たのか？」

「ふあっ!？」

「お、この反応は当たりか?？おいおい、中学時代朴念仁だったお前にもついに春が来たのか?感慨深いものだなw」

「笑いが隠せてねえぞ……………」

「で、誰なんだよ、お前の好きな子は。」

「だから、そんなんじやねえっての……」

俺は横目でチラツと星を見る。星は誰とも話すわけでもなく、机に突っ伏して眠っている。

「お……まさか星なのか？」

こいつ、なんでそんなに鋭いんだよ!?

友田は席から身をのりだし、周りに声が聞こえないくらいの小声で話した。

「星ってお前、趣味悪いな。あんな根暗ボツチのどこがいいんだよ。」
「だからちげえよ。……昨日あいつがハンカチ落としたのを拾って、それを渡すタイミングを見計らってただけだったの。」

実際俺が星を好きなのは自分でもわからん。ただ…昨日の姿が印象に残っているだけだ。

「はく律儀だねえ。ま、そういうところは良いとおもうけどさ。まあ頑張れよ。」

「……」

返事は返さない。横目で見た星の周りには、一人も人がいなかった。

昼休み。結局あれから星にハンカチは渡せなかった。だが、星は昼休みには屋上で弁当を食べている。クラスで盗み聞きした。

「悪い、友田。今日は一人で弁当食って。」

「あ?どうしたんだよ。」

「星にハンカチ返してくるだけだ。じゃー!」

「あ、おい！」

友田が呼び掛けるがそれを無視し、ハンカチをポケットに入れて教室を出た。

向かうは屋上。俺達の学校の屋上は空いているが、掃除がいきとおつておらず正直言つて汚い。じめじめしていて、雨が降つた後にはキノコが生えていたという噂もある。なので、そこで飯を食うようなやつはそうそういない。まあ、だからこそ一人で飯を食うにはいいのかもしれない。

「さて……」

屋上への扉を開ける。普段使われている回数が少ないからか開けるとときにガガガガと擦れた音がする。

「フヒツ!？」

星の音がする。が、姿が見えない。屋上を見渡すがその姿はどこにもなかった。

「星……?？」

声がある方を探ると、階段室の日陰、扉から見て死角となる位置に星はいた。

「え、私……?？」

「あ、えっと……」

……沈黙が続く。だが、声をかけたのも俺、用事があるのも俺なのだ。意を決してポケットから例のハンカチを取り出した。

「これ、お前のだろ。前に落としたりのを拾ったんだ。」

「え、あ、前……?前つて、あのとときのか……!」

思い至つたのか星の顔が羞恥で赤らみ、うつむいてしまう。

俺もあの時を思いだし、つい星から顔を背けてしまった。

「……………」

またもや沈黙。互いが互いに恥ずかしがり、顔を見ることもまともにできなくなってしまう。第三者が見れば何をやっているんだと思うだろうが、いたつて俺は真剣である。

「と、とにかく!これ返すよ。ちゃんと洗濯もしたから。」

「う、うん。ありがとう……」

星に近づき、ハンカチを返す。その時、星が食べていた弁当が目にはいる。それは、一言で言えばキノコのフルコースだった。キノコの混ぜご飯、キノコ炒め、etc……

「……キノコ、好きなのか？」

ハンカチの柄や趣味も思いだし、そう質問をする。思えば、この質問で星との関係が変わったのだと思う。

質問を受けた星を見ると先程まで赤らんでいた顔が更に赤く、というか紅く、おっとりとしていた瞳は見開き、見るからに先程と違っていた。どこかで見たことがあると思っただが、あれだ。テレビでヤバイ薬とかにトリップヒヤッしている奴らだ。

「そう!!!キノコこそ私のmy best friend!!!エリンギのしなやかな白体!ナメコの滑り!キノコ達の力強い生命力!!!じめじめとした私の仲間……!」

「……………へ?」

星は呆気にとられる俺を見て我に帰り、急激に縮こまっていった。「あ……………ごめん。気持ち悪かったよな。ハンカチ、ありがとう。じゃあ……………」

俺は呆けたまま、屋上を立ち去る星を眺めることしか出来なかった。それほど先程の星の姿は衝撃的だった。

「なんだ、あいつ……………」

気が付いたら昼休みも終盤となり、俺は弁当を食い損ねた。しかし、そんなことが全く気にならないほど、俺は星輝子という少女に惹かれていつていた。

俺とメタル

(ごめん。気持ち悪かったよな。)

なんで星は、あんなことを言ったんだ……？

「ボーツとすんなよ月宮！」

「え……あぐ!？」

レシーブ練習中、別のことを考えていた俺は友田が打ったボールに見事に顔面レシーブを繰り出した。

「月宮！大丈夫か!？」

「あ、ああ……」

「お前今日昼休みから何か変だぞ。何があつたんだ？」

「……いや、すまん。気を付ける。」

結局あの後もぐだぐだになった。スパイクはスカルし、レシーブは取れないし、あげくに顧問からは取れないボール永遠にだされて走らされるし……

「はあ……」

自転車をこぎながら、俺は昼休みの星のことを考えている。

確かに驚いたが、あそこまで怯えた反応をするか……？

我に帰った星は先程の見る影もないほど縮こまり、怯えたように屋上から出ていった。それが妙に頭に残っていた。

「あーもう!!切り替えだ切り替え!!バレーに大事なものはミスを引きず

らない切り替えの良さ!!」

いくら考えたって分かりっこないんだから自転車で坂を下りながら声を出して叫ぶ。近隣の皆さんごめんなさい。

そうして走っていると、今の自分の元凶である灰色の髪の少女が歩いているのが見えた。

あれは………星？

部活が終わり辺りは暗くなっているなか、こんな時間まで何をしていたのだろうか。声をかけるべきか、正直迷う。が、屋上での姿がどうしても頭をよぎった。俺は自転車で星のところまで向かった。

「おい、星。」

「ヒッ!？」

星は俺の声に反応し、恐る恐る振り向いて俺の顔を確認する。そして俺だと判断した瞬間、脱兎の如く走り出した。

「ハッ!？」

俺は急いで自転車をこぎ、星を追いかける。まあ、見るからに運動不足な星の走りと、自転車に乗ってる俺だ。その差はすぐに縮まっていた。

「なんで逃げるんだよ!？」

「な、なんで、追いかけて、来るんだ!？」

返事をしてしまったからか、星の足がもつれ、転んでしまう。

「星!!」

俺は自転車からおり、すぐに星のところへ向かう。

「大丈夫か!？」

パツと見怪我は見られない。服が少し汚れてしまった程度だ。

「立てるか? 怪我はないか?」

「え、あ、う………」

返事はこない。どこか怪我してるのだろうか?

「とりあえずそのベンチに座ろう。歩けるか?」

「う、うん………」

俺は自転車を近くに置き、二人でベンチに向かった。が、

「……………」

本日三度目の沈黙。コミュ障が二人集まるとこうなるのだ。

「……その、怪我はないんだな？」

「う、うん。大丈夫。……じゃあ、私は、帰るね。」

「あ、ちよっと待ってくれ！」

早々に還ろうとする星を呼び止める。聞いてもいい質問なのか分からないが、聞かなければいけない気がした。

「なんで昼休み、俺から逃げたんだ？」

その質問に、帰ろうとしていて星は足を止め、こちらを見る。その顔には、酷く怯えの感情が表れていた。

「……お前こそ、なんで私を追いかけて来るんだ？私を、変だと思わないのか？」

「……変？」

いやまあそりゃ……

「……変だとは、思う。」

「！なら……何で私から離れないんだ!？」

「はっ。」

星はポロポロと、でもはつきりとした声で語り始めた。

「……中学校のころは、誰も私のそばにいなかった。ヒヤッハーして、変な目で見られて……皆私から遠ざかって、クスクス笑っていた。そして、今も……。」

……そんなには変なのか？キノコが好きじゃ……メタルが好きじゃいけなかったのか……？」

「星……。」

うつむき、呟くように言う星。

「だけど、私は、好きなんだ……。」

その言葉の重さを、俺はどれだけ理解できただろうか。

「……私を変だと思うんだったら、何で、私に声をかけるんだ？」

「それは……。」

未だに俺はこの感情に名前をつけることができていない。だが、これだけは言えることがある。

「……ほうっっておけなかったんだ。星のことを。」

自転車ですれ違った時から、屋上で話した時から、俺はずっと、星のことを考えていた。

「ほうっておけなかった……？何で……」

「……俺にもわからん。」

「……フヒ、なんだ、それは……」

俺の言葉に顔を綻ばせる星。

「やっと笑ったな。」

「へ……？」

「さつきからずっと暗い顔してたからな。俺は、今の星の顔の方がいいと思う。」

「な、なんだ……!?私を煽っても、なんにもならないぞ……!?」

……猜疑心がひどい。まあ、ずっとぼっちだったのなら、人を信じるというのも難しいのかもしれない。……友田には感謝しよう。

「キノコのこと、メタルのことも俺は詳しくないけど、俺が友達になつてやるよ。」

「え………いいのか？」

「いいんだよ。俺がそうしたいからするんだ。これからよろしくな。」

そう言うと、星の体がふるふるとうちふるえている。なんとなく察した俺はそつと耳を塞いだ。が、

「ピヤツハアアアアアア!!!トモダチ……トモダチ!!!いい響きだあ!!!
マツックスハアアアアアアアトオ!!!」

「ぐあああああ!!!」

星のシャウトが塞いだ手を貫いて鼓膜に響く。近隣の皆さん度々ごめんなさい。

「あ、ご、ごめん……」

「いや、大丈夫だ……」

「でも、トモダチ……フフツ、トモダチか……いいな……」

「よし、帰るか。」

辺りもすつかり暗くなり、光は街灯と月明かりだけとなってしまうた。

「そういえば、星はこんな時間まで何をしていたんだ？」

俺はバレーボールだが、星が何の部活動に入ってるか知らないしな。

そう聞くと星は少し慌てたようにしたが、ちゃんと答えてくれた。が、その答えは俺の想像の斜め上に行くものだった。

「あ、あのな……本当はあまり言っちゃいけないんだが……アイドルのレッスン、してるんだ……」

「……………は？」

アイドル？

星Ⅱアイドル

キノコⅡアイドル

ヒヤツハーⅡアイドル

「アイドル!?マジで!」

「ま、まあな……………」

アイドル……………アイドルか……………

「アイドルっていうと、あの天海春香とかの？」

「う、うん。会社は違うけど、そんな感じ。今はまだ、レッスンはっかりで、ライブはしたことないけど。」

「そうなのか……………つと、」

ピリリリ

俺のケータイからメールの着信音が鳴る。確認すると、母親から「いつ帰るの?」というメールだった。

「悪いな、星。親がカンカンだから、もうそろそろ帰るな。」

「そうか……………まあ、大分話していたもんな……………。こんなに人と話を

したのは、久しぶりだ……。」

「……また明日だ。」

「……………！ああ、また明日、だな！」

俺は星と別れ帰路につく。……………やっぱり、家まで送った方がよかつただろうか？だが、ここから近いからいいと断られたしな……………流石にほぼ初対面の女子の家までついていくというのはまずいよな……………。

その後俺は本屋によってキノコ図鑑とメタル雑誌を買って帰った。家では冷めた料理と遅くなるなら一言言いなさいとカンカンの母親が待っていた。

俺と苛めっ子

「お、おはよう……」

「……おはよう。」

いや、友達になるとは言ったけどさ……校門の前で挙動不審に待ち構えて、俺を見るなり駆け寄ってくるのはどうかと思うんだが……

「挨拶、友達に……フヒヒ。」

……まあいいか。ここは友達として乗っかってやるところだろう。

「じゃあ、私はこれで……」

「へ？あ、うん……」

星は挨拶だけかわすとそそくさと一人で玄関へと向かっていつてしまった。一緒に行こうと思っただのに……だが、挨拶だけであんなに嬉しそうにされると、こっちも少し照れるな……

少しの感慨深さを感じながら俺もクラスへ向かうことにする。

「あれは……星さんと……」

そんな俺と星のやり取りを、校門の影から誰かが見ていることには俺は最後まで気づかなかった。

クラスに着けば、星は先についていたようで自分の席に座っている。俺と星の席は少し離れているので、自発的に近づかなければ話すようなこともないだろう。

「おーはよ、月宮ー」

「おう友田、おはよう。」

「今日は調子大丈夫か？昨日のお前酷かったからなー。」

「大丈夫だ、問題ない。……多分。」

「多分てw」

そんな下らない話をしていると、大きな音を鳴らせてクラスの戸が開かれ、1人の女子が入ってきた。そちらを見てみると、どこかで見たことがあるような女子が、誰かを探してているようにキョロキョロとクラスを見回していた。

そう考えているうちに少女やがて目標を見つけたように歩きだし、俺の方へと向かってきた。……て、俺？

「あなた、ちよつと付いてきてもらっていい？」

そう言うと女子は俺の腕を掴み強制的に立たせ、引きずりながらクラスから引つ張り出された。もちろん抵抗はしたが、この女、武道かなにかやってるのか、筋肉量が俺とは違う。

「え、ちよ、まっ……」

有無を言わさぬ行動に俺含め誰も動けず、俺は女子に連れていかれた。

連れてこられた先は屋上だった。女子は俺と扉の間に道を塞ぐように仁王立ちをしていた。え、なにこれ、喧嘩するの？先ほどは突然のことでよく見ていなかったが、その女子をよく見ると、長い黒髪に整った容姿、有り体に言って美少女だった。

「……朝のこと、見てたわ。あの子に先に目をつけたのは私なの。だから手を出さなくてもらつていいかしら？」

「……は？」

状況が飲み込めない。まず朝のことってなんだ？

「とぼけないで！今日の朝、校門で、ほ、星さんと挨拶してたでしょ!!」

「……うん。」

「何よその軽い反応は!!……とにかく！あの子には手を出さないで！いいわね!!」

「……はいそうですか、とはならないだろ。お前、思い出したぞ。星のことを苛めてるっていう、校倉要だろ。」

「うっ……いや、あれは、その……」

「苛めてるやつに友達ができるのも気に入らないってか。最低だな。」

そう反論すると、校倉は開き直ったかのように堂々と話し始めた。

「ええ、私は彼女を苛めているわ、あの子の安寧のためにね。」

「……は？どういうことだ？」

校倉が何をいつてるのか全く分からなかったが、校倉は熱がこもったかのように話を進めた。

「だって星さん、あんなに可愛らしいのに、周りから笑われてるんですよ！クラスの中では星さんを悪く言う声も上がっています、これでは星さんに悪の手が迫るのも時間の問題……そこで私は考えたのです。私が星さんを苛めてるふりをすることで星さんをより凄惨な苛めから守ろう、とー!」

「……はあ？」

「嫌な子がいても自分の手は汚したくないもの……そこで私が対応すること、苛めの不穏分子達の鬱憤を解消させるというわけです。第一、他の誰かが何かして、星さんのキレイな顔に傷でもつけたら世界の損失です!!星さんへはその、ポーズですが、苛めてるふりだけしています……」

……つまりこういうことか？

星が気に入らなく、苛めたい奴等がいる。

←

そいつらが星に危害を加える前に校倉が代わりに苛めることで鬱憤をはらさせる。

「……話を聞くと、星のノートに落書きしたり、上履きを隠したりしているそうだが？」

「まあ……気付かれないように星さんのノートに少し自分の言葉を書いたりしましたね。上履きに関しては迷惑にならない時間にしか動かしてません。用を済ませたらすぐに返してますし。」

「他には？」

「星さんの迷惑になるようなことはしていませんよ！」

「……………こいつ、本当に苛めっ子じゃないのか？」

「……じゃあ星が、いつも一人で屋上で昼飯を食べているのは？」

「そう言う到校倉は少し困り顔になり、眩きぎみに言った。」

「それは……私はなにもしていないわ。星さんは最初から屋上で食べてたみたい。」

「そうか……まあ、屋上ははじめじめしてるから、星が好きなかもしれないけどな。」

「ちやかすように言うと、校倉の態度が急変した。」

「星さんの好みを知ってるからって調子に乗らないでいただけますか？大体私の方が詳しく知ってます。星さん好みのキノコだって、最近アイドルになったことだって。」

「え!!マジか!!」

「当然です。まああなたは星さんの隣にいたと言ってもここ数日の話。そんなことなんて知らないでしょうが、星さんは近々アイドルデビューを……」

「や、それは星から聞いた。校倉がそれを知っていることに驚いてる。」

「な……！本人の口から……！なんて羨ましい……！じゃなくて……」

「……段々と分かってきた。校倉は、純粋に星のことが好きなかだけのようなのだ。」

「……あなたが星さんと友達になったことは想定外でした。星さんの

魅力に籠絡された悪い虫が付いたと思いましたが……ある程度は！星さんに信用されてるようですね……ですが！私はあなたのことを認めたくわけではないので!!そこところは忘れないようにしてください!!」

「……お前、正直に星に言った方がいいんじゃないか？」

「え？」

「友達になってくださいって。」

「そう言うと、校倉は気持ち悪いにやけ顔をしたと思えば、萎んだ悲しそうな顔をした。」

「それは無理よ。……どんな形でも、私は星さんを苛めてるのよ?どんな顔して『友達になって』なんて言えるのよ……。私はクラスの人から星さんを守るわ。私の手が汚れても。」

「……星が、クラスの中でも浮いてるのは知っている。影口を聞くのもしよっちゅうだ。だが、

「それなら影からじゃなく、星の横で守ってやれよ。星に向かう悪意から。」

「……でも……。」

「……煮えきらないな。こうなったら……」

「校倉、お前……」

キーンコーンカーンコーン

「……昼休み時間あるか?あればまた屋上来てくれ。早く戻らないと先生に怒られるぞ。」

「……分かったわ。」

「おう、どうだった、月宮?あれ、校倉さんだろ?学年でもトップの美人って噂の。」

「あー……何でもなかった。」

「……まさか、告白か!？」

「それはないな。あの筋肉女はないわ。」

「は!?!文武両道、才色兼備を地で行く校倉さんだぞ!?!あの子に告白されたら絶対OKするなく♪」

キーンコーンカーンコーン……

俺は弁当を持って屋上へ行く。扉を開けた先、朝と同じく、校倉が仁王立ちして待っていた。

「……話の続きをしましょうか。それで、何が言いたいの?」

「もう一度聞くんが、星の友達になるつもりはないのか?」

「……朝言ったとおりよ。私は星さんの友達になる資格はないわ。

……私自身が許さないのよ。」

「そうか……本人を前にしてもか?」

「え?」

「……………ドウモ。」

「……………え?」

俺の後ろから星が出てくる。星には休み時間のうちに会ってほしい人がいる、とだけ伝えて来てもらった。

「ほ、ほほほほほ、星さん!」

「月宮くん……この人は……?」

「星のファンだ。星と友達になりたいんだってよ。」

「はっ!?!月宮くん、何を……」

「えっ……そうなのか!?!」

星がキラキラした目で校倉を見る。こいつが星のことを好きなの

は分かっている。ならば、本人から言われればどうだろうか。効果は
てきめんなようだ。

「えっ、いや、その、ちよつと待ってね!？」

「……………」

(は!?!星さんが私に話しかけてる!?!ちよつと待って!?!待って、私!!私
は星さんのことを思つてとはいえ、星さんを苛めてきたのよ……そん
な私が星さんの友達になんて……)

「…………待たせたわね。星さん。その男が言ったことは出鱈目よ。何故
なら私はあなたを苛めている主犯よ?そんな私が友達なんて……」

「…………いじめ?私、転校してからはいじめられたことなんてないけど
……………」

「…………え?」

「だそうだと、校倉。」

さつき星に聞いたら、どうやら苛められているという自覚がなかつ
たようだ。校倉が徹底的に星の迷惑にならないことを意識してやつ
た結果、当の星にすら気付かれていなかった。

「星に苛められていた自覚はない。お前は気兼ねなく星と仲良くすれ
ばいいだろ。」

「いや、だけど……………」

「あ、校倉さん…………?で、いいのか?」

「あ、は、はい!校倉です!」

「よく分かってないんだけど、わ、私は、友達になれたら、嬉しいな
……………」

「なります!!!!これからよろしくね、星さん!!!!!!」